

ヒーローやヒロインではなく——『3・11 慟哭の記録』のすすめ——

大学宗教部長・教育人間科学部教授 伊藤 悟 Hiro Shono

大津波の被災地に立ったとき、私は言葉を失った。口から出てきた言葉と言えは、「キリエ、エレイン(神よ憐れみ給え)」だけであった。経験したわけではないが、戦災後の焼け野原を彷彿させた。車でカーナビに従って走っても、いたるところが寸断されて行く手が阻まれた。避難所に行くのと独特のおいが漂っていた。自衛隊の用意した簡易風呂(テント)に長い列ができ、雪の降り積もるなか、スパーやガソリンスタンドには、いつ入荷するかも定かでない何かを待って、人と車がひしめき合っていた。私だけではない。だれもが言語を喪失する経験をした。そのなかで A.C の「ぼぼぼぼん」こ

だまでしょうか」だけが、私たちの意識の表面を空しく駆け巡っていた。被災地に視察に行つて帰ってくる。どうも気持ちだが「high」になる。すぐに何かしなければという思いに

駆られる。何かしらのボランティアをして帰ってくるとなおさらだ。自分の些細な働きが被災者に喜んでもらえたという達成感が欺瞞を引き起こし始めるのだ。そこには被災地で頑張った私(ヒーロー)が輝いている。震災直後にも至る所でヒーローが誕生した。いくつもの命がヒーローに助けられた。マスコミを通して、たくさんさんのヒーロー・インタビュ

やヒーロー・ストーリーを聞かされてきた。われわれはそうした人間の美しさに触れるたびに感動した。「犠牲者たち」もヒーローやヒロインにされた。犠牲とは何だろう。何の犠牲となったのだろうか。「犠牲」とは本来いけにえであり、なだめの供物のことである。「犠牲者」と呼ばれた瞬間、被害者や被災者は地震や津波、そして原発に奉げられた供物となり、その命は美化されていく。しかしどこか虚しい。彼らは何の犠

牲になったというのか。もつと一つ一つのいのちに大切な涙や苦しみや嘆きや叫びがあるはずだ。聴き留めようとしなければ聴こえてこない声。深層に響く慟哭(どこう)。それらを今のうち丁寧についでおかなければ、われわれは失った言葉を回復することができないのではあるまいか。

『3・11 慟哭の記録』は、本学と親交の深い東北学院大学の金菱清准教授とそのゼミ生がまとめた「東北学院大学震災の記録プロジェクト」の成果本である。金菱准教授は同じキリスト教大学である関西学院大学・大学院の出身でもある。宮城・岩手・福島27市町村の被災したあらゆる立場の方々71人が寄稿し、それら生の声を540頁もの記録集としてまとめたのが本書だ。文字も小さく、写真も図表も一切掲載されていない。文字だけで構成されている。読んで私は、最初に



新曜社刊